

新規設立 農業法人の概要集 Vol.2

～フロンランナーを目指して～



平成 31 年 2 月

(一社) 鳥取県農業会議

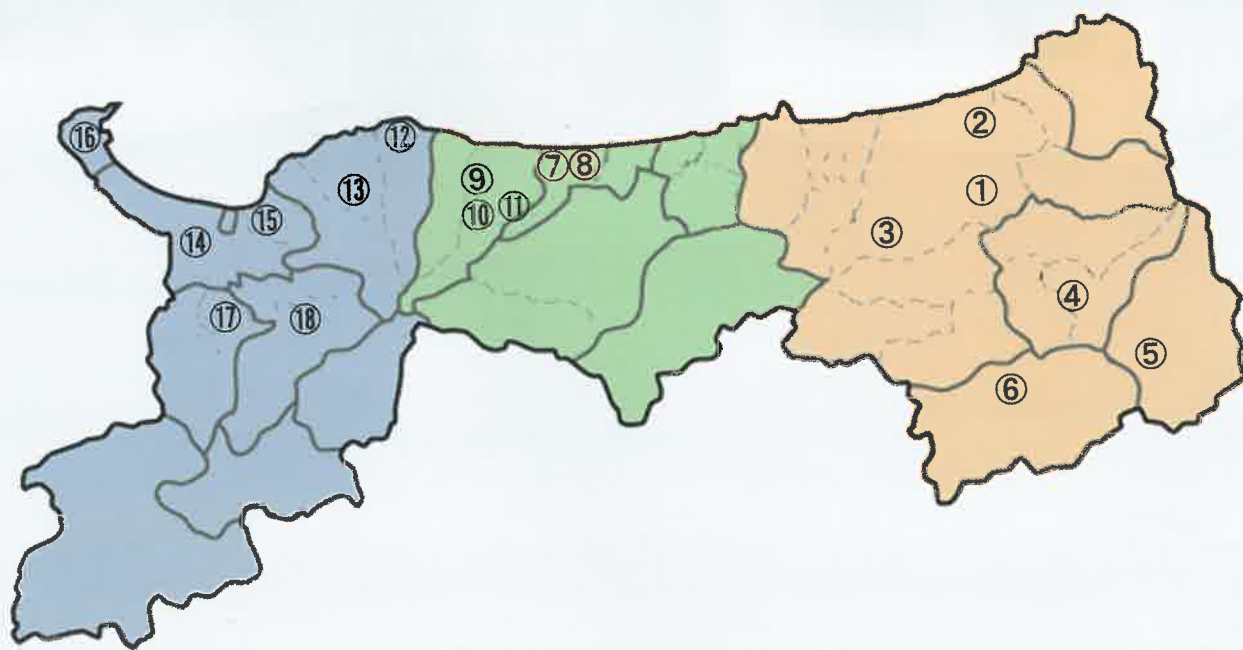
(公財) 鳥取県農業農村担い手育成機構

INTRODUCTION

農業は、従事者の高齢化、後継者不足、遊休農地の増加など、激変の時期にあり、先行きが不透明なことは確実です。しかし、このような時代だからこそビジネスチャンスと捉え、しっかりとした経営理念をベースに足腰の強い農業経営を築き上げることで、この逆境の時代を乗り越えようと生業からビジネスへステップアップしたたくましい農業法人達。

本誌では、平成29年度に鳥取県内で農業に夢と希望を抱き、トップランナーを目指して農業法人を立ち上げた18法人にスポットを当て、その経営理念、目指す農業経営などを掲載し紹介しています。法人経営を目指している農業者の方の参考になれば幸いです。

おわりに、執筆していただいた法人代表者、農業改良普及所の担当者並びに農業委員会の皆さまには厚くお礼を申し上げます。



CONTENTS

①(株)	あめかわ農園	鳥取市古郡家…… 2
②(株)	ファームSORA	鳥取市福部町…… 3
③(農)	河内こわらび	鳥取市河内…… 4
④(株)	わたや	八頭郡八頭町…… 5
⑤(農)	あぐり赤松	八頭郡若桜町…… 6
⑥(株)	うしぶせファーム	八頭郡智頭町…… 7
⑦(株)	ファーム山脇	東伯郡北栄町…… 8
⑧(株)	中原農園	東伯郡北栄町…… 9
⑨(株)	岡村牧場	東伯郡琴浦町…… 10
⑩(同)	三浦牧場	東伯郡琴浦町…… 11
⑪(同)	前田牧場	東伯郡琴浦町…… 12
⑫(株)	Earth corporation	西伯郡大山町…… 13
⑬藤屋	(株)	西伯郡大山町…… 14
⑭(株)	山陰農業研究所	米子市旗ヶ崎…… 15
⑮(株)	耕作	米子市淀江町…… 16
⑯(株)	葱屋KAJITANI	境港市森岡町…… 17
⑰(同)	清水川	西伯郡南部町…… 18
⑱(同)	長者原百姓	西伯郡伯耆町…… 19

株式会社 あめかわ農園

地域の農家とともに
潤う農業を实践する。



データ

- ・設立 平成29年4月
- ・所在地 鳥取市古郡家
- ・主な作目 水稻
- ・代表者名 雨河 昇
- ・従業員数 2名
- ・資本金 500万円

代表の雨河昇さんは、昭和50年にUターンし農業後継者として就農されました。徐々に地元の米里地区の委託希望者から水田を受託され、規模を拡大して水稻、大豆の栽培を行ってきました。

雨河さんの丁寧な稲作りと人柄から、地元の評判は高く、地主さんからも信頼され規模拡大が進んだようです。就農当初から地域の農業活性化を考えながら地域の人と共に発展を考えられてきました。

平成21年度には息子の雅裕さんも就農、家族経営協定も締結されました。この頃には、水田面積は約25haまで拡大、水稻17ha、大豆8haの栽培でした。雅裕さんの就農を機にどんどん面積は拡大し、転作は大豆を飼料用米に変えて水稻1本にするなど経営を見直しながら発展されました。

その間、法人化についても考えられたようですが、特に大きな問題も無いため踏み切るには至らなかったようです。面積が拡大するに従い労力不足が問題となりましたが、アルバイトや、長期雇用等で補ってきたようです。

その後、安定的な労力確保、継続的な安定経営等を考えると法人化した方が良いと判断され、平成29年4月にそれまでの家族経営から、奥さんと息子雅裕さんを加えた3人の役員体制で法人をスタートされました。



現在の経営は水稻のみで約45haとなっ

ています。今後はこれを50haまで拡大したいとのこと。ただ、今までは拡大を優先して進めた面もありますが、今後は機械を効率的に活用できるように団地化するなど、集約を図りながら拡大していく方向です。



法人となって、まだ日が浅いのですが変わったことは、農舎に「(株)あめかわ農園」と看板を掲げたところ、早速米業者から連絡があり、早速取引も開始されたようです。法人設立前は、JAを中心の玄米出荷でしたが、これからは、直接販売等の販路にも目を向けていくよう検討されています。

また、GAPについては、勉強中で指導員の資格も取得しました。消費者も安心して購入できるように、会社として自信を持って栽培管理したお米を売っていきたい意向もあるようです。



現在の一番の課題は雇用対策です。期間限定でパート等を雇用していますが、年間雇用の正社員はまだいません。規模拡大には雇用が必ず必要になるため、農業大学校を始めとする関係機関にも相談しているところです。

これらの意向や考えは、親子で共有しておられます。これからも3人が会社役員として共通の目線で地域への貢献を考えながら経営を考えて行かれるようです。

(執筆：鳥取農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【雨河代表取締役】

今後も地域の農地を守って、地域の方と共に、地域農業の活性化を図っていきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(㎡)
29	田	185,453
30	田	110,239
計		295,692

《農業委員会からのコメント》

- ・平成2年に農業委員としての職務について以来、18年に渡り地域農業の発展のために、担い手の育成や優良農地の確保、農業経営の合理化などにご尽力いただきました。法人設立後もますますのご活躍を期待しています。

事業に関わるすべての人が幸せになれる経営に尽力する。



データ

- ・設立 平成29年4月
- ・所在地 鳥取市福部町湯山
- ・主な作目 らっきょう、梨
- ・代表者名 湯邨 勲
- ・従業員数 2名
- ・資本金 500万円

平成29年4月に法人化した株式会社ファームSORAは、らっきょうと梨を複合経営する会社である。

湯邨社長は、通算25年の長きにわたり、山湯山らっきょう生産組合長として生産者を統一し、生産出荷の取りまとめ、組織をリードしながら、安定販売に努力されてきたが、平成30年7月末をもって、その職を辞された。職を退く計画は3年前から立てておられ、その間、後継の若き組合長（現在33歳）の育成に尽力されてきた。後継者育成に長けた社長である。

社長が法人化に向かいたいと思われたのもちょうど3年前のその頃。会社を立ち上げて農地を守り、次世代へ渡し、引き継いでもらいたい。会社として少しでも耕作地を拡大していきたいとの思いからであった。

平成30年の経営面積はらっきょう5.7ha、梨90a。梨の品種は二十世紀63a、新甘泉10a、新高7a、新興7a、王秋3aである。

らっきょうは近年市場単価が良く好評。福部町では平成28、29年と連続で販売額10億円を達成した。この背景には平成28年に「鳥取砂丘らっきょう」「ふくべ砂丘らっきょう」で農林水産省GI（地理的表示）を取得したことが影響していると考えている。この下支えとなっ

たのが、平成13年度に策定された「福部らっきょう10億円達成プラン」により、県補助金を活用して機械化体系が確立されたこともある。これにより農家数は減ったものの栽培面積は維持され、3年後には概ね10億円達成できた、と社長は語る。



また、梨は将来、面積100aを目指して、品種を増やし、長期にわたって販売できる体制を作りたいとのこと。

社長は、地域の高齢化等により栽培維持が困難になり、荒廃地が増えることを懸念している。荒廃地を引き受けて、昔の緑豊かな畑の姿に戻れるよう、会社としても地域貢献していきたいと考えておられる。



（執筆：鳥取農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【湯邨代表取締役】

会社名「SORA」は、孫の「天空(そら)」君(11才)の名前から引用。農地をしっかりと守って、将来、天空君に経営を渡していきたいと考えています。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

- ・地理的表示GI登録された「ふくべ砂丘らっきょう」と鳥取を代表する果物の梨を生産し、規模拡大をしながら安定経営をしておられます。荒廃農地の解消に繋がるよう、農地の確保について助言を行っていききたいと思います。

河内に荒れ地を
つぐらない
みんなで守ろう
村の農地



データ

- ・設立 平成29年4月
- ・所在地 鳥取市河内
- ・主な作目 水稻、里芋
- ・代表者名 竹内 健
- ・組合員数 19名
- ・資本金 174,000円

河内集落は、鳥取市の中心市街地から車でおよそ30分の山あいの集落で、作付けされなくなった農地を守ろうと平成23年に地元の有志で農作業を請け負う「河内農作業等受託組合」を設立。以来、学校給食用の里芋をはじめ、そばやサツマイモの栽培に取り組んできた。

とにかく年々農業をやる人が少なくなっている。傾斜地や棚田も多く、道路や水路が十分に整備されていないため生産効率が悪いという課題を抱えていた。



【水稻栽培】

地域の農業・農地を次世代につなぐために平成29～32年度にかけて12haの農地で基盤整備を行うことを決めた。

地域で農業が継続できる体制づくりをめざし平成29年4月に(農)河内こわらびを設立。新たな担い手として機構から農地を借りて農業経営を開始した。

基盤整備事業、農地中間管理事業、法人化をセットで取り組むことで、個々の農家の負担を減らし、みんなで一緒に農業に取り組めるよう環境を整えた。

土地利用型的水稻は低コストで栽培し、味が落ちないように粃貯蔵して、生きた米を出荷時に粃摺りして届けている。

地元の高齢者や女性の労力を活用できる集約的な作物として、里芋のほか大根や落花生を栽培、アスパラガスやブルーベリーの導入・体験農園の整備も検討している。



【学校給食用の里芋栽培】

組合員・員外を問わず、できるだけ集落のみんなに農作業に参加してもらって、地域内でお金がまわるようなシステムにしたい。そうすることで経営が安定し、継続できていると考えている。

(執筆：鳥取農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【竹内代表理事】

集落内の幅広い人の協力を得ながら「集落内の農地は自分たちで守る、耕作放棄地は出さない」ことはもちろん、住んでいる人が自信と誇りを持って、ずっと住み続けたいと思える「うるおいのある集落」になればと思っています。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
29	田	77,514
30	田	11,301
計		88,815

《農業委員会からのコメント》

・基盤整備を機に、地域の農地を地元農家がしっかり守り、次世代に継承する取り組みを展開し、持続的な農業経営を目指しておられます。模範となる取り組みであり、強い経営体になっていただくことを期待しています。

地域の農地は地域で
守り、地域の利益は地
域で守る。



データ

- ・設立 平成30年3月
- ・所在地 八頭郡八頭町才代
- ・主な作目 ねばりっこ、らっきょう、ニンニク、酒米
- ・代表者名 坂尾 文正
- ・従業員数 2名
- ・資本金 2,000万円

当社は農業を基軸として、①地域活性化、②雇用の創出（社会的弱者含め）を達成するためには、人材確保と資金調達が必要と考えている。

特に、高効率、低コスト化を図り各生産物の付加価値増加を実現するためには十分な資金調達を行う必要があり、従来型農業に見られる間接金融（銀行等からの借入れ）のみに頼る方式ではなく、幅広い分野からの直接金融（株式や債券等）による支援を受けるべく株式会社設立に至ったものである。



【ねばりっ娘 ネット張り作業】

平成30年度は、鳥取県北栄町の北条砂丘（経営面積50a）で、ねばりっこ（20a）、らっきょう（15a）、ニンニク（15a）栽培を開始している。酒米は、協力農家（約15ha）が栽培したものを当社が買上げ、酒造業者に販売している。

平成35年度には経営面積20haに規模拡大し、ねばりっこ200トン、7000万円、らっきょう100トン、5500万円、ニンニク100トン、8000万円の売り上げ（いずれも生鮮出荷の場合）を目指している。

更に、ねばりっこ冷凍とろろ、らっきょう

漬け、ニンニク漬け等の加工製品をOEM、若しくは自社工場設置にて製造し、付加価値を高めた製品としても供給する計画である。

なお、生鮮品に関しては従来品の約3割～5割安で卸販売可能とする大量生産、機械化、コスト削減生産方式の体制を確立する予定である。また、販売先は関東を中心としたスーパー、飲食店舗を予定し、既にその販売交渉中である。

今後の課題としては、それら目標を達成するための設備投資等に係る資金調達を投資によって賄うことを計画しており、その実現のための人員体制（財務担当等）強化が課題となる。



【ニンニク 植付け作業】

当社の発展のために地域との連携は必須と考える。そのため地域の地権者、生産者等と連携を図り、当社事業で発生する収益を地域分配する（協力農家へ報酬が適切に支払われる体制を整える）考えである。更に、当社の設備投資で配備する大型農業機械等はそのオペレータも含めて地域農業者が困難とする作業の支援に活用する考えである。そして、事業を通じて地域貢献・農業担い手の育成・農福連携・環境保全を進めていく所存である。

（執筆：坂尾代表取締役）

《代表者のひとこと》



【坂尾代表取締役】

当社は①地域農業者の所得向上
②農業を核とする地域活性化
③高齢者、障がい者、生活困窮者等の農業就業機会の創出を目指し、地域の発展とともに歩む会社です。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
（平成30年12月31日現在）

年度	地目	面積(m ²)
30	畑	2,500

《農業委員会からのコメント》

・規模拡大に意欲的で、地域の活性化を考え、担い手の育成等を進めながら、所得向上を目指しておられます。各関係機関と連携を図りながら、地域農業の発展のため頑張ってくださいことを期待しています。

○ 赤松の農地を守ろう
○ 健康で生きがいをもつて暮らそう
○ 次の世代へ、また次へ



データ

- ・設立 平成29年9月
- ・所在地 八頭郡若桜町赤松
- ・主な作目 水稻、野菜
- ・代表者名 山本 義紀
- ・組合員数 8名
- ・資本金 40万円

私たちの法人は、農地を守る、みんなで協力する、農業機械に金をかけない、を掲げ組織作りに取り組みました。我々の集落若桜町大字赤松小字内町集落は14戸の小さな集落であります。昭和の中期までは米やナシが主作目の農業が中心の地域でありました。高度経済成長時代に入り、農家の後継ぎは皆、サラリーマンになり、農業を専業とする人はいない時代となりました。

今の組合員8人も同様であり、農業専業ではありません。兼業や親の手伝いをしていた年代の60代後半から70代前半の構成員であり、家としての跡継ぎがいる家でも農業を継ぐことが確定している家はありません。大字赤松地域を見ても同様であります。

そうしたことから、中山間地域の農業を継続して行くには集落営農しかない、と考え、平成27年度に水稻関係機械共同利用の任意組織「あぐり内町」を設立しました。それにより各個人の生産費低減や労力不足の補完など一定の成果が得られましたが、組織をさらに強化するために法人化しました。

法人化するまでは経営範囲を小字内町集落限定としていましたが柔軟に運営できるようにと「あぐり赤松」と改名し、活動可能な範囲を大字に拡大しました。

家としての跡継ぎのいる農家で、そう遠くないうち順々に勤めを辞める跡取りが数名あります。私たちの活動により、彼らが退職後に気楽に農業に親しみ、その楽しさを味わ

うことができれば良いと思っています。そうした環境づくりが目標でもあります。



平成30年は、法人化して実質1年目です。経営面積は水稻を中心に約13haで、白ネギやソバ・大豆の栽培にも取り組んでおります。現時点では作業の必要性に応じてその都度対応している状況であります。

今年1年の成果及び反省を踏まえて、より計画的な運営形態を構築していきたいと考えております。地域の農地が守られ、組合員の健康寿命が延びる農業経営を目指して進んでいきます。



(執筆：山本代表理事)

《代表者のひとこと》



【山本代表理事】

少子高齢化の進む中山間地で始めた集落営農。地域コミュニティーの維持と農地保全の二兎を求めて取り組みます。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
29	田	93,375
	畑	25,594
計		118,969

《農業委員会からのコメント》

- ・若桜町内で3番目に設立された農業法人であり、農家としての後継ぎがほとんどいない中で、農地中間管理事業を活用しながら農地保全に努めている。農業経営及び保全を維持できるよう支援を行っていきたい。

地域の若い経営者が
中心となり、
若手のパワーで
地域の畜産を引っ張っ
ていきたい



データ

- ・設 立 平成29年11月
- ・所 在 地 八頭郡智頭町智頭
- ・主な作目 肉用牛
- ・代表者名 岸本 真広
- ・従業員数 1名、パート1名
- ・資 本 金 300万円

株式会社うしぶせファームは、智頭町で140頭の和牛を飼養し、繁殖・肥育一貫経営を行っている。代表の岸本真広さんは、平成26年に経営継承していたが、雇用環境の充実を目指して平成29年11月に法人化した。「うしぶせ」は地元の牛臥山（うしぶせやま）に由来する。先代は、生産した牛肉の味を自ら確かめ、それを消費者に食べてもらいたいとの思いから肉の加工・販売施設を作り、年に数頭「うしぶせファーム」の名で販売し好評を博していた。地元ではなじみのあるこの屋号をそのまま法人名にした。

きめの細かい肉質と融点が高い脂により、脂の旨味を持ちながらあっさりとした口溶けが特徴のブランド牛肉「万葉牛」の生産者としても知られている。

平成29年に仙台市で開催された第11回全国和牛能力共進会に県代表として出品。和牛のオリンピックとも称されるこの大会において、「花の7区」と呼ばれ注目度の高い、種牛・産肉能力を総合評価する第7区で、肉質日本一に輝いた。

「育て方によって肉や脂の質は変わる。もちろん血統も大事だが、よく食べてよく寝てもらうことが一番」と岸本代表。牛舎の衛生管理を徹底し、清潔で過ごしやすい環境を維持している。飼料を厳選し、飲み水は井戸水を与えている。年間を通して水温が一定であ

るため夏は冷たく、冬には温かく感じ、「ストレスなくたっぷり飲んでくれる。よく食べるためには大切なこと」。



町内の転作田で自ら栽培した牧草を与えることで、飼料自給率の向上と地域への貢献も果たしている。



平成30年4月にはJA鳥取いなばが鳥取市青谷町に整備した「いかり原牛舎」に入植し、100頭規模の牛舎1棟を管理して増頭中。「当面は年間出荷頭数100頭を目標にしているが、さらにその上も目指していきたい」と岸本代表はさらなる経営発展に向けて準備を進めている。

（執筆：八頭農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【岸本代表取締役】

経営を拡大するなかで、同年代の仲間とともに地域の畜産を牽引し、地域全体を元気にしていきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

・智頭町内の貴重な担い手であり、畜産農家のみならず町内農家の信頼も厚く、法人化により更に期待が高まっている。生産拡大などの意欲に応えられる支援を関係機関と連携して行なっていきたい。

豊かな自然環境を守り、安心・安全・信頼のおける美味しい自社農産物をお客様に提供する。



データ

- ・設立 平成29年5月
- ・所在地 東伯郡北栄町大谷
- ・主な作目 ラッキョウ、スイカ、花き類、コマツナ、トマト
- ・代表者名 山脇 茂則
- ・従業員数 6名、パート2~3名
- ・資本金 300万円

5年くらい前から規模拡大を進めて、雇用も増やしてきたが、社会保険に入っていなかったために辞めた人がおり、良い人材を集めるためには法人化は必要と考えていた。また、農協からも法人化を勧められていたが、会社にしたのは良いが、人件費は払わないといけなかったので、現在の規模では年によって2品目程度でも出来が悪ければ、倒産するのではなにかと不安で躊躇していた。

そのような時に、法人化した人の話を聞いて、やはり人材確保のためには法人化が有利であり、現在の規模でも法人化できる自信がついた。また、税理士の先生にシミュレーションしてもらった結果、節税効果も高いことが分かったことから、法人化を決意し、平成29年5月に法人化した。



ミッション（経営理念）として、上記以外に以下の4つ掲げている。

1. 時代を先取りし、最高の品質創りを重点に社業の発展を図り、地域社会に貢献する。
1. 適切な労務管理で無駄なく生産効率を高める。

1. 堅実経営を行い、着実に安定成長する会社にする。

1. 会社の繁栄と全社員の生活向上の一致を図る。

従業員には、各自責任品目の担当を固定し、生産部の指導会等にもその品目の担当者が出席するようにしており、先々責任品目はその担当者だけで栽培ができるように誘導している。



法人化して良かったことは、個人経営に比べ信用度が高くなり、従業員も安定して働くことができること。何より、法人化することで時間を有効活用する意識が高まった。法人化の前は、朝早くから夕方遅くまでだらだらと仕事をしていましたが、勤務時間を定めることによって、けじめがついた結果、仕事の効率が上がり、計画的に休めるようになった。

農業を始めたのは、砂地に遊休農地が多く、何か作れるものは無いと思案した結果、その時に増えつつあったラッキョウ栽培を始めたことがきっかけであり、地域に対する思いは人一倍強い。

（執筆：東伯農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【山脇代表取締役】

消費者においしいと言って頂ける商品を作って、着実に安定成長する会社でありたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

- ・個人経営の頃から地域のリーダーとして活躍。法人化により経営の合理化をさらに追求し、地域の農地集積を図ると共に雇用体制構築のモデルとして発展されることを期待します。

・消費者に喜ばれる野菜
の供給
・地域の耕作放棄地の
解消



データ

- ・設立 平成30年1月
- ・所在地 東伯郡北栄町大谷
- ・主な作目 トマト、スイカ、
ブロッコリー、
キャベツ、
ハウレンソウ 他
- ・代表者名 中原 一男
- ・従業員数 8名、パート2名
- ・資本金 900万円

長年個人経営で野菜を栽培してきたが、規模拡大していくうちに、人手が足りなくなり、人員募集を行ったところ中々良い人材が集まらなかった。法人化すれば良い人材が集まるのではないかと考え、普及所に相談に行き、法人化の研修を受講したのがきっかけで、平成30年1月に法人化した。

野菜の販売は、大玉スイカ等2割は農協に出荷しているが、その他8割は農協の直売所で販売しており、直売所の販売金額は中部でNo.1を誇る。「直売所は、自分で価格を付けることができ、又、消費者からの喜びの声を直接聞くことができるのが魅力」と中原さんは語る。



仕事を行うにあたっては、従業員の能力と作業効率の向上を常に考え、仕事は2～3人のグループに分かれて行い、グループのリーダーが指導するようにしている。それにより、仕事の効率アップ、従業員の責任感の向上、リーダーの自立を同時に行うことができる。

常に従業員の雇用安定を1番に考え、できるだけ収益が上がるように経営を見直してお

り、現在、多くの品目を栽培しているが、管理が難しいので、利益率が低い品目は止め、利益率が高い品目を増やす計画である。また、時期によって気象や販売単価の変動があるので、危険分散のため、同じ品目を長期に栽培するようにしたいとのこと。

また、今後も規模拡大を計画しており、低コストハウスを本年6棟増設する予定である。



北栄町でも耕作放棄地が発生しているのを見ると心が痛む。隣のほ場が荒れていると貸してくれと言い、周りの高齢者等からは作ってくれないかと言ってくる。そのような状況なので、従業員は何人いても足りない。



(執筆：東伯農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【中原代表取締役】

一緒に働く従業員の生活の安定を目指しています。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(㎡)
30	畑	10,812

《農業委員会からのコメント》

- ・個人経営の頃から発展意欲は高く、独自の営農スタイルを築かれた。さらに法人化によって農地集積は元より従業員の生活安定を図る雇用体制構築のモデルとして発展されることを期待しています。

株式会社 岡村牧場

長命連産に心がけた
健康な牛作り。
安心・安全な牛乳を
消費者へ。
牛も人も幸せに。



データ

- ・設 立 平成30年1月
- ・所 在 地 東伯郡琴浦町八橋
- ・主な作目 酪農
- ・代表者名 岡村 宙博 みちひろ
- ・従業員数 4名
- ・資本金 300万円

株式会社岡村牧場が酪農を営まれている大
成地区は、琴浦町の中央に位置する標高25
0メートルの開拓地で、大山山麓に広がる畜
産の盛んな地域である。

平成30年1月に設立された岡村牧場は、
終戦後に祖父が営農を開始し、昭和47年に
父、平成17年に現経営者の宙博氏が就農さ
れて現在に至っている。

小学3年生の4代目は幼いながら酪農に興
味を持っており、中部酪農祭ではリードマン
として愛牛と共に出場した。



法人化を志向したのは、補助事業を活用し
た規模拡大を計画しており、補助事業の要件
に法人化が求められたことがきっかけである。

しかし、法人は個人の営農に比べて、従業
員を雇用する際の社会保険制度や求人などの
手続きが迅速に行われることもあり、社会的
な信用も高い株式会社として法人を設立した。

また、経営移譲を考えた場合や雇用者が多
くなるほど、法人化のメリットは大きくなっ

ていくと実感している。

現在の経営規模は、乳牛を約110頭（成
牛70頭、育成牛40頭）飼養しており、自
給飼料は飼料用トウモロコシ11haとイタ
リアンライグラス5haを栽培している。

今後の経営方針として、「牛も人も幸せ」な
ゆとりのある酪農経営をめざし、子供が後を
継ぐことを念頭に置いた経営規模の拡大を実
施していきたいと考えている。

また、この地域は高齢化が進んでいるため、
地域の畑が荒廃しないように心がけており、
今後も飼料用トウモロコシの作付け面積を増
やしていきたいと考えている。

最後に、宙博氏は鳥取県ホルスタイン改良
同志会の会長も務めておられるなど、乳牛の
改良にも熱心である。共進会では上位入賞の
常連で、平成29年度鳥取県畜産共進会では
乳牛の部でグランドチャンピオンを獲得され
るなどの実績がある。



（執筆：東伯農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【岡村代表取締役】

平成31年度に補助事業を活用してさ
らなる飛躍を考えている。

現在、牛舎や施設の設計と新たな事
業計画の作成に取り組んでいる。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

- ・補助事業を活用した規模拡大による、
経営のさらなる発展を期待する。
自給飼料面積の増反にあたっては農
地あっせん等、利用集積を支援して
いきたい

地域との関わりを大切に、共栄・共存をはかり、牛にも人にも風通しの良い酪農経営を目指します。



データ

- ・設立 平成30年2月
- ・所在地 東伯郡琴浦町光好
- ・主な作目 酪農
- ・代表者名 三浦 幹雄
- ・従業員数 3名
- ・資本金 200万円



合同会社三浦牧場は大山乳業のお膝元、琴浦町で酪農経営を営んでおり、地元では「ミキファーム」という愛称で親しまれている（「ミキ」は三浦代表の名前、幹雄からきている）。

光好地区の集落内に位置する3棟の牛舎で乳牛120頭（経産牛70頭、育成牛50頭）を飼育しており、周辺の田畑16haで飼料用トウモロコシとイタリアンライグラスを生産し、自給飼料を積極的に活用している。



現在は役員2名と従業員3名で日々の作業を行っており、従業員の年齢も若く家族的な雰囲気牛舎はいつもにぎやかである。三浦牧場は法人化前から雇用条件等の整備を行い従業員へ提示するなど個人経営としては進ん

だ雇用管理を行っており、従業員にとってはとても働きやすい職場であった。

また、従業員と協力し乳牛の改良にも力を入れており、高い育成技術とあいまって共進会では上位入賞の常連牧場である。



三浦牧場は平成30年2月に法人に移行したが、法人化の目的は第三者継承をスムーズに行うためであり、現在、将来の経営継承に向けて後継者へ経営管理に関する知識、牛の飼育管理、牧草の栽培技術等の習得を進めている。三浦代表は社員と話し合うことが最も重要だと考えており、風通しの良い職場を作ること日々心がけている。

来春から従業員も1名増える予定であり、経営基盤を充実させ収益性の向上を図りながら、地域に貢献し、地域に愛され、琴浦町を代表する牧場として「ミキファーム」は今後も頑張っていく。

（執筆：東伯農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【三浦代表社員】

集落への貢献を第一に考え、農地の保全を図りながら、地域と共栄・共存をはかることが三浦牧場の存在意義だと思っています。地域に愛される牧場を目指して、これからも社員と協力しながらがんばっていきます。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
（平成30年12月31日現在）

年度	地目	面積(㎡)
30	田	14,590

《農業委員会からのコメント》

- ・三浦牧場は以前から町内酪農家のリーダー的存在で、地域農業を牽引してこられた。

日頃から農業委員会とは連携を密にしており、農地の利用集積、将来の経営継承等に向けて引き続き支援していきたい。

良質な牛乳を生産する
ために、徹底した飼
養管理を行う



データ

- ・設立 平成29年6月
- ・所在地 東伯郡琴浦町森藤
- ・主な作目 酪農
- ・代表者名 前田 泰明
- ・従業員数 -
- ・資本金 100万円

合同会社前田牧場は鳥取県の中央に位置し、県内有数の酪農地帯である琴浦町で飼養頭数90頭、自給粗飼料11haの規模の酪農家である。



前田代表は実家が酪農家で幼少期の頃から手伝いをしていたことがあり、酪農が身近な存在であった。また自営業に面白さを感じ、農業高校を卒業後、北海道の短大を経て就農し現在に至っている。

合同会社前田牧場は前田代表への経営継承を機に、節税などのことも考え、平成29年6月に法人化を行った。法人化する以前から家族経営協定を結んでおり、従業員は雇用せず、



酪農ヘルパーを利用しながら家族のみでの経営を行っている。

前田牧場では経営を行っていく中で、利益をどのように出すかを常に考えながら日々の経営に取り組んでいる。特に牛群の改良に力を入れ、乳量が多く、長命連産の牛群を作ること目標にしており、子牛の育成にも力を入れ、良い牛を作ること心掛けています。また家族内のコミュニケーションを取ることも大切にしている。

また前田代表は大山乳業の青年部長を務めており、今年の6月の父の日には鳥取県庁を訪れるなど、PR活動など積極的に行っている。



今後の目標は飼養規模を維持しつつ、自家産の生乳を使ったカフェ等の6次産業化を目指していきたいとのこと。

(執筆：東伯農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【前田代表社員】

法人化することによって経営が充実した。これからは安定した経営を行っていきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

- ・前田牧場は農地中間管理機構との契約面積増加を検討中で、農業委員会との連携を図りながら利用集積を進めていく。地域農業の発展に寄与されることを期待し、今後も支援していきたい。

現役世代が活躍する
持続可能な農業を実現する。



データ

- ・設立 平成29年7月
- ・所在地 西伯郡大山町住吉
- ・主な作目 ブロッコリー・白ねぎ
- ・代表者名 井内 昭二
- ・従業員数 4名
- ・資本金 300万円

井内代表は平成21年に、公益財団法人鳥取県農業農村担い手育成機構が行っているアグリスタート研修の一期生として兵庫県から単身、来鳥。県中部で施設野菜を学んだ後、大山町の大規模ブロッコリー農家で研修を積み、翌年同町に就農した。

就農直後から台風や豪雪被害等の苦難の連続であったが、関係者から暖かい励ましや助言があり、経営を安定させることができた。

「大山町民はとにかく人柄が良く、面倒見も良い。県外者でも快く受け入れ、技術も惜しまず教えてくれた。(井内代表)」と語る。

そして関わる人に感謝し、周辺農家の助言を素直に受け入れ実践してきたことで周囲に認められ、高齢となった農家から「農地を使ってくれないか。」といった要望が寄せられるようになった。

また、大規模なブロッコリー経営を行っている若手農家と交流を深めるうち、刺激を受けて大規模化を決意し、それまで農繁期に労力を補完し合っていた40歳代の3名が中心となって株式会社の設立に至った。



現在では、大山町特産のブロッコリー16haの他、白ねぎ2ha、スイートコーン1haを栽培している。

特に白ねぎ栽培では、調整時の臭気や騒音が問題となるが、近隣住民の理解も得られている。これも周囲に認められている証であろう。



株式会社を設立し、規模拡大を行うにあたり必要な機械、作業場等の整備を行った。作業場には社員が衛生的で快適に働けるよう、エアコン、トイレ、休憩スペースに加え、シャワー室を整備している。さらに今後は宿泊棟も併設する予定である。

設立したばかりの会社であるが、井内代表は「バトンタッチできる人材を育成したい。受け継いでやっていきたいと思われる会社になければならない。」と既に10年後を見据えている。

(執筆：西部農業改良普及所 大山普及支所)

《代表者のひとこと》



【井内代表取締役】

鳥取県に来て約10年。地域や行政等の多くの人に支えられてここまでこられた。今後は地域に貢献できるよう頑張りたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
29	田	2,139
	畑	22,699
30	畑	8,217
計		33,055

《農業委員会からのコメント》

・大山町に移住され、就農後は気象災害も乗り越え、地縁血縁が無いなかで、着実に地域の信頼を得て規模を拡大してこられました。今後とも、本町に移住して、農業をしたいと思う方の受け皿・見本となっていきたい。

『未来につながる農業をめざす』
高齡化が進展し地域農業が疲弊する中、荒廃農地の未然防止等、大山町農業の活性化と観光業の発展を図ります。



データ

- ・設立 平成29年7月
- ・所在地 西伯郡大山町高田
- ・主な作目 ブロッコリー、芝
- ・代表者名 藤原 清和
- ・従業員数 4名
- ・資本金 300万円

「自らの栽培技術等を意欲ある若者に伝承し、次代の担い手を育成したい。」と考えていた町内のブロッコリー生産者(現従業員、前大山町認定アグリマイスター)と、「栽培技術や経営管理能力をさらに高めたい。」と考えていた藤原代表が出会ったことをきっかけに、栽培技術に止まらず経営管理能力と生産基盤の継承を一義的な目標とし、併せて労働力と農業用機械施設の一元化により規模拡大を行うため、福利厚生等の充実した法人の設立により雇用の確保を図ることとした。

従業員も増え、現在、ブロッコリー20.5ha、芝6ha、スイートコーン0.8haを栽培している他、新たに鳥取型低コストハウス2棟(6a)を設置し、地元スーパーへのオクラの出荷も始め、夏期の収入確保につないでいる。

また、冷蔵庫(3坪)を設置し、昨秋から収穫後のブロッコリーの貯蔵に利用している。ブロッコリー生産で最も過酷な作業となっている深夜の収穫作業を昼間へシフトすることで、従業員の作業負担を軽減するねらいである。

芝では地元若手の生産者がいるものの、複数の生産組合があり、生産者同士のつながりが希薄であったことから、昨年、「若手芝生産者のつどい」を開催し、芝生産者の交流を深める取り組みを始めている。

周年雇用体制の確立と売上の確保を図るため、今後さらに若く活力のある労働力を地元から雇用し、ブロッコリー30ha、芝10ha、スイートコーン2ha、オクラ0.2haに拡大する計画としており、加えてオクラの自社加工や冬期のイチゴ観光もぎとり園も検討中である。

藤原代表は、「約10年前、脱サラして親の基盤を受け継ぎ、芝の栽培を開始した。同じ農業をするなら食べ物を作りたいと思い、町の特産物であるブロッコリー栽培を始めた。ブロッコリー栽培は初めてであったが、先にブロッコリーを栽培していた旧友や先輩農家等、多くの人に支えられ、楽しみながら営農することができた。引き続き研鑽や交流を重ね、地域に貢献できる会社づくりに励みたい。」と語る。

思いを形にできる力を持つ若い経営者にこれからも期待したい。



(執筆：西部農業改良普及所 大山普及支所)

《代表者のひとこと》



【藤原代表取締役】

卓越した先輩の技術や経営ノウハウをしっかりと受け継いでいるところであり、引き続き地盤を固めながら、大山町の農業を支える会社づくりに努めたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(㎡)
29	田	7,899
	畑	48,682
30	田	39,374
	畑	39,861
計		135,816

《農業委員会からのコメント》

・事業所があるエリアのみならず、大山町内で広域的に農地を借りて、大規模に経営をされています。旧町を越えた農地の受け手として、また農業の魅力を若者に伝える存在として期待します。

大地を耕し
地域を豊かに



データ

- ・設立 平成29年10月
- ・所在地 米子市旗ヶ崎
- ・主な作目 小麦
- ・代表者名 笠谷 信明
- ・従業員数 3人
- ・資本金 30万円

平成22年から大山こむぎプロジェクトの事務局長であった笠谷代表は、平成29年10月新たに株式会社山陰農業研究所を設立することとなった。

これまで転作や裏作が主だった小麦生産が耕作放棄地の解消、連作障害の解消となりうると考えたからだ。

法人化したことをきっかけに自らも初めて農業に取り組み、新たな一歩が踏み出せたという。

将来的には大山こむぎプロジェクトの中心的生产者となり、安定供給を確保したブランド確立のために一層努力するという覚悟だ。



平成30年は、江府町、大山町、米子市で平坦地から標高の高い600mのところまでの作付けを行い、300キロ台の生産をあげることができ、まずまずのスタートとなった。

(株)福成の元代表者が構成メンバーの一人となったため、栽培や機械作業でも大きな力を得て、連携を取りながら作業を行っている。30年播種は、新たに日吉津村でも予定しており、大豆との2毛作も視野に

入れている。

今後、研究所でも自前の機械をもち、適期作業、面積拡大に努める考えだ。連作障害を防ぐため、異なった作物を作ることで農家同士がつながる「農農連携」など新たなシステム作りにも取り組み、将来的には福祉作業所との連携や6次産業化を目指し、働き手が輝けるフィールドを作りたいと抱負を語る。

一般消費者はもちろんのこと、地域学校給食のパンの供給により、子どもたちに笑顔を届けおいしいと言ってもらえることが喜びとなっていると目を輝かせた。子どものころからの夢であった耕作放棄地の解消が、少しでもかなえばと強い意欲を見せる。

大山こむぎプロジェクトの仲間、生産部の方々との出会いが大きな力となり、自ら農業に取り組むことの喜びを日々感じながら、山陰地区小麦の先進的な経営モデルとなるように取り組んでいく。



(執筆：西部農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【笠谷代表取締役】

耕作放棄地を活用して小麦の栽培をしていきます。

経営理念にも掲げている「大地を耕し地域を豊かに」を実践する農業経営をおこないたいと思います。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
29	畑	18,148
30	田	27,760
	畑	20,995
計		66,903

《農業委員会からのコメント》

- ・大山こむぎプロジェクトとしての新たな作物栽培へのチャレンジは、今後の地域農業の振興上、意義があるものと思います。

耕作放棄地問題の解消につながる取り組みとして、当委員会としても大いに期待しています。

我が社で作った野菜
を食べてもらい、お客
さんに笑顔が出る野
菜作りを目指す



データ

- ・設立 平成29年5月
- ・所在地 米子市淀江町
- ・主な作目 にんじん、米、白ねぎ、ゴボウ
- ・代表者名 京谷 耕作
- ・従業員数 10名
- ・資本金 100万円

平成元年、両親の経営する農業(葉たばこ、秋冬にんじん)を引き継いで平成21年フレッシュベジタブル京谷として、多彩な野菜やその加工品づくりを始めてきました。その後、農地の保全、従業員の福利厚生などの社会保障を充実するため平成29年5月に株式会社「耕作」を立ちあげました。

現在、京谷さんは、にんじん、白ねぎ、水稲など多彩な作物を栽培する法人代表で経営面積は、にんじん5ha、白ねぎ0.4ha、水稲8haのほか、サラダゴボウやにんにくなどの栽培も手掛けています。



元々は農産物の栽培を主目的としていましたが、今では、にんにく、ゴボウ、にんじんなどの加工品も手掛けています。

砂丘地に海に近いこともあり、時には塩害や強風で作物に被害が及ぶことがあります。このためほ場周りに緑肥を植えつけて、塩害対策、排水対策、暴風対策なども実施しています。

また農産物栽培や加工品などの販売のための従業員の雇用にも苦労しているところですが、特に最近では農業をやりたいという若者も増えているので、楽しくやれる農業を目指して雇用の確保に努めています。

経営目標としては、化学肥料や農薬の使用を極力避け、良質堆肥を活用した土作り、さらに

は環境に調和した持続的な農業を行うこと。さらに食べていただいて感動を与える野菜作りをホームページなどで消費者にアピールし、環境に優しい農業の推進を図っていきたいとのことです。

2016年には、野菜ソムリエサミットで「京谷さんちのにんじん」が二つ星を獲得しました。また、2017年の野菜ソムリエサミットでも「京谷さんちのグロリアにんじん」が金賞を獲得しました。ソムリエ協会の審査員から「生で食べたときのポリポリした歯ごたえ感が良く、甘みも強くておいしい。」との評価を頂いたところです。



米子市淀江町は、耕作放棄地も増えてきており、砂丘畑ににんじん畑を増やすことで景観形成に努めたとのこと。

また地元の小学生を招いて収穫体験も開催するなど、地域の食育活動などの地域貢献にも積極的に取り組んでいます。

今後、にんじん等の6次化を視野に入れながら、気象災害に強い野菜作りを進めて法人経営の安定に向けて邁進していきたいとのことです。

(執筆 西部農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【京谷代表取締役】

地域の耕作放棄地対策で遊休地をよみがえらせ、化学肥料や農薬を極力使わず、堆肥を十分に投入した土づくりで出来た野菜を味わって欲しいです。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
30	田	17,742
	畑	45,090
計		62,832

《農業委員会からのコメント》

- ・加工品や良質な品質などが外部からも評価されています。今後も淀江地区の担い手として、規模拡大、雇用の増加など、順調に経営が発展し、地域農業でのリーダーシップを発揮していただけることを期待しています。

株式会社 葱屋KAJITANI

農業のイメージを
えるとともに弓浜を
日本の白ねぎ産地
にする



データ

- ・設 立 平成29年5月
- ・所 在 地 境港市森岡町
- ・主な作目 白ネギ
- ・代表者名 梶谷 重幸
- ・従業員数 9人
- ・資本金 500万円

梶谷氏は、10年前まで農業とはかけ離れたアパレル関係の仕事をしながら祖母の白ねぎ栽培を手伝っていたが、次第に白ねぎ作りの面白さに目覚め、平成21年に祖母の経営基盤を継承し就農した。年間30aからスタートした梶谷氏のねぎ作りは平成25年に父親の退職を機に1.3haに規模拡大。その後も雇用を入れながら徐々に拡大し現在の5haに至る。

規模拡大を進める中で大きな問題となったのが雑草との戦いであった。借り入れる農地には遊休地も多く、何も手を施さなければあっという間にねぎが雑草に埋もれてしまうほど雑草の種の宝庫であった。梶谷氏は土壌消毒や除草剤も効果的に使うのはもちろん、とにかく耕耘作業に労力を惜しまない。草が少しでも目立ったら耕耘、定植までにこまめにくり返し耕耘を行うことで後々の除草作業が楽になるとのこと。

また、ほ場ごとのこまめな施肥管理と堆肥投入による徹底した土づくりにより、規模拡大をすすめながらも単位面積あたりの収量を落とさない生産力を維持している。このことは特筆すべき点である。

梶谷氏が法人化を考えるにあたり、同市内ですでに法人化した河岡農園の存在は大きかった。梶谷氏にとっては目標でありライバルでもある河岡農園がさらなる規模拡大と経営の安定を進める中で法人化

を行ったことは同じく将来大きな目標を掲げる梶谷氏にとっても法人化は必要と感じさせるのに十分であった。

一方で法人経営の難しさも実感する。家族だけで経営していた頃とは異なり、法人化したことで従業員への定時給与の支払いなど確実に収入が入るよう切れ目のない安定した出荷が必要となる。そのため、時には生育遅れがあっても土寄せ等の作業を優先しなければならず、収穫時に品質面で満足できないジレンマを感じることも出てきた。そんなときに助けとなったのは、地域の諸先輩からのアドバイスや同じ白ねぎを作る若い仲間たちの存在だった。それ故に自らを支えてくれる白ねぎ産地への思いは熱い。高齢化で担い手が減少する産地をなんとか盛り上げていきたいとの思いから、河岡農園代表と境港市役所職員とともに、同市内の若手白ねぎ農家で構成する梶谷会（現在は次世代白ねぎ農家の会「NE∞T」（ネクスト）に名称変更）を立ち上げ、新規就農者への栽培技術指導や交流会での団結を図っている。「日々試行錯誤で未熟者です」と話す梶谷氏であるが、弓浜のみならず鳥取県のねぎ産地を担う存在として期待は高まる。

（執筆：西部農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【梶谷代表取締役】

白ねぎ作りは、自分の存在を高めてくれました。それ故に一緒に頑張ってくれる家族や従業員、今の産地を築いてこられた諸先輩の方々、そして境港の人たちへの感謝の気持ちを忘れてはいけなと感じています。

《農地中間管理事業の活用状況》

現時点での中間管理機構との契約は無し

《農業委員会からのコメント》

- ・農業委員会は日頃より葱屋 KAJITANI と連携を密にしており、農地の斡旋等、農地の集積を進めている。若手農家の模範となる法人として、また NE∞T の交流を通して地域の農業を牽引していただくよう期待し、今後も支援していきたい。

- ③ 安心して米とお酒
を売っていきこう
- ② 地域の活性化
- ① 耕作放棄地をなくす



データ

- ・設立 平成30年1月
- ・所在地 西伯郡南部町清水川
- ・主な作目 水稲
- ・代表者名 庄倉 三保子
- ・従業員数 1人
- ・資本金 80万円

清水川地区は、南部町（旧西伯町）の北部に位置し、比較的耕作条件の良い天津地区に位置している。

前身である『清水川農事組合』は次世代に農業を継承し、耕作放棄地をださないという理念に賛同する8戸の住民により平成19年に設立された。耕作面積5.6haからの出発であった。

当初から、儲かる農業を目標に、消費者に直接販売するルートを開拓、生産者が販売価格を設定するなど当時としては画期的なやり方にも挑戦してきた。

ご多聞にもれず、この地区でも多くの農家には後継者がなく農地をどのようにして保全継承していくのかが大きな課題であったが、社会的信用を得るためにも平成30年1月に法人化を果たした。

本地区の泉『清水井』は、大国主命の蘇生復活の神話に由来する貴重な地域の宝である。

この泉を水源として平成26年から古代米の田植え、稲刈りの体験イベントを町内外に発信し、地域の魅力を大いに知らしめる活動を行ってきた。

平成29年からは、自分たちが作った古代米の清酒「比賣神乃雫」を、神話とのタイアップで、地域の再生にアピールしている。組合員が代表して販売していたこの清酒の取組みも法人化することで組合に移行

することが可能となった。

他にも清水川集落とその周辺に伝わる神話を、わかりやすく伝えながら歩く『再生神話ガイド歩き』など、来町される観光客にも対応できる人材育成や、里地里山や散策道の整備・管理などの活動も積極的に行っている。こうして神話をはじめとした地域資源を活用した都市農村交流を活発に行うとともに、特産品の開発も積極的に行い、地域の若年層のみならず他地域の方との農業生産活動への理解向上を図ることを目的とした活動も活発に行っている。



（執筆：西部農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【庄倉代表社員】

1人では、収益は上がらない。みんなですれば収益はあがり、気持ちも楽しい。みんなですれば、いいこといっぱい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
30	田	78,117

《農業委員会からのコメント》

- ・今後も地域農業の担い手となり、遊休農地の解消への取組みや多様な農業の展開を実践してもらいたい。
- なお、代表の庄倉さんは女性農業委員でもあり、細やかな視点からの農業振興と、地域のリーダーとして地域づくり活動が、他の地域にとってモデルとなることを期待しています。

農業はサービス業であると考え、農地管理に徹し、地域と密着した農業を目指します



データ

- ・設立 平成29年9月
- ・所在地 西伯郡柏耆町坂長
- ・主な作目 水稻、白ねぎ
- ・代表者名 志直 充年
- ・従業員数 3名
- ・資本金 50万円

代表である志直氏はこれまで専業従業員2名を雇用し、水稻を中心に経営を行ってきた。4年前には「がんばる農家プラン事業」を活用し、経営面積を3倍以上にまで拡大してきた。周辺地域からの農地貸借の要請も増える中、積極的に農地を受け入れてきた経緯がある。

後継者への継承という今後のことを考えると法人化の必要を強く感じていたので、思い切って当初の予定を繰り上げ平成29年9月に法人化の運びとなった。



法人の運営にあたっては経営安定に向けての規模の拡大、経営の多角化、後継者の育成を三つの柱と考えている。

法人化のあと、さらに従業員1名を確保し、社会保険の面でも安心して就業できるようになった。人も集まりやすくなり、さらなる経営発展を目指す力となったという。

新しい取り組みとして農地アプリ「アグリノート」の活用を積極的に行っている。

瞬時に情報を共有し、農地管理と作業履歴

の管理など IT の力で圃場を効率的に管理し、栽培効果をあげているという。



【アプリで管理】

周辺農家の期待に応え、地域の受け皿として米子市を中心に農地を集積し、45haは引受けられる体制を作ること、今、導入している白ねぎの規模拡大を行い、作業施設の整備によって作業効率をあげ収益の増加を目指すこと、施設野菜は、技術習得と収益の増加を目指すことを今後の目標としている。

状況に応じた必要な管理や対応が出来る人材育成にも力を入れ、経営管理、さらなる栽培技術の向上に邁進したいと考えているとのこと。

志直代表の願いである安心して後継者へのバトンタッチができること、儲かる農業が確立し次世代が大きな希望をもって就農できることを、目指して従業員一同一丸となり日々活動している。

(執筆：西部農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【志直代表社員】

安定した経営を確立し、自立できる後継者の確保、次世代への橋渡しを切に願っております。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積
(平成30年12月31日現在)

年度	地目	面積(m ²)
29	田	42,714
30	田	66,950
計		109,664

《農業委員会からのコメント》

- ・代表の志直さんは積極的に農地集積に努められておられます。今後も規模拡大、経営の多角化、後継者育成を目指され、地域農地の保全、遊休農地発生防止にご尽力いただき、更なる発展とご活躍を期待いたします。

農業経営相談所の支援フロー図

農業者・法人経営体・集落営農組織

人・農地チーム会議(重点指導農業者の協議)

普及所・JAサポートセンター

① 重点指導農業者候補の選定・提示

〔窓口での
相談申請〕*

農業経営相談所・経営戦略検討会議

- ② 重点指導農業者の決定(戦略検討会議で選定し、相談所で決定)
- ③ 経営状況の診断(専門家等による経営状況の把握、診断)
- ④ 経営戦略の策定・相談カルテの作成(戦略検討会議)
- ⑨ 経営戦略の見直し(支援チームの提言、要請等)

② 決定通知

⑤ 支援チームの編成・派遣決定
⑨ ※コーディネーターが連絡調整

(支援活動後) 支援活動状況の報告 ⑦
専門家等の提言、追加支援の要請 ⑧

支援チーム

(経営戦略検討会議と連携して活動)

⑥ 専門家による支援活動
専門家による調査活動

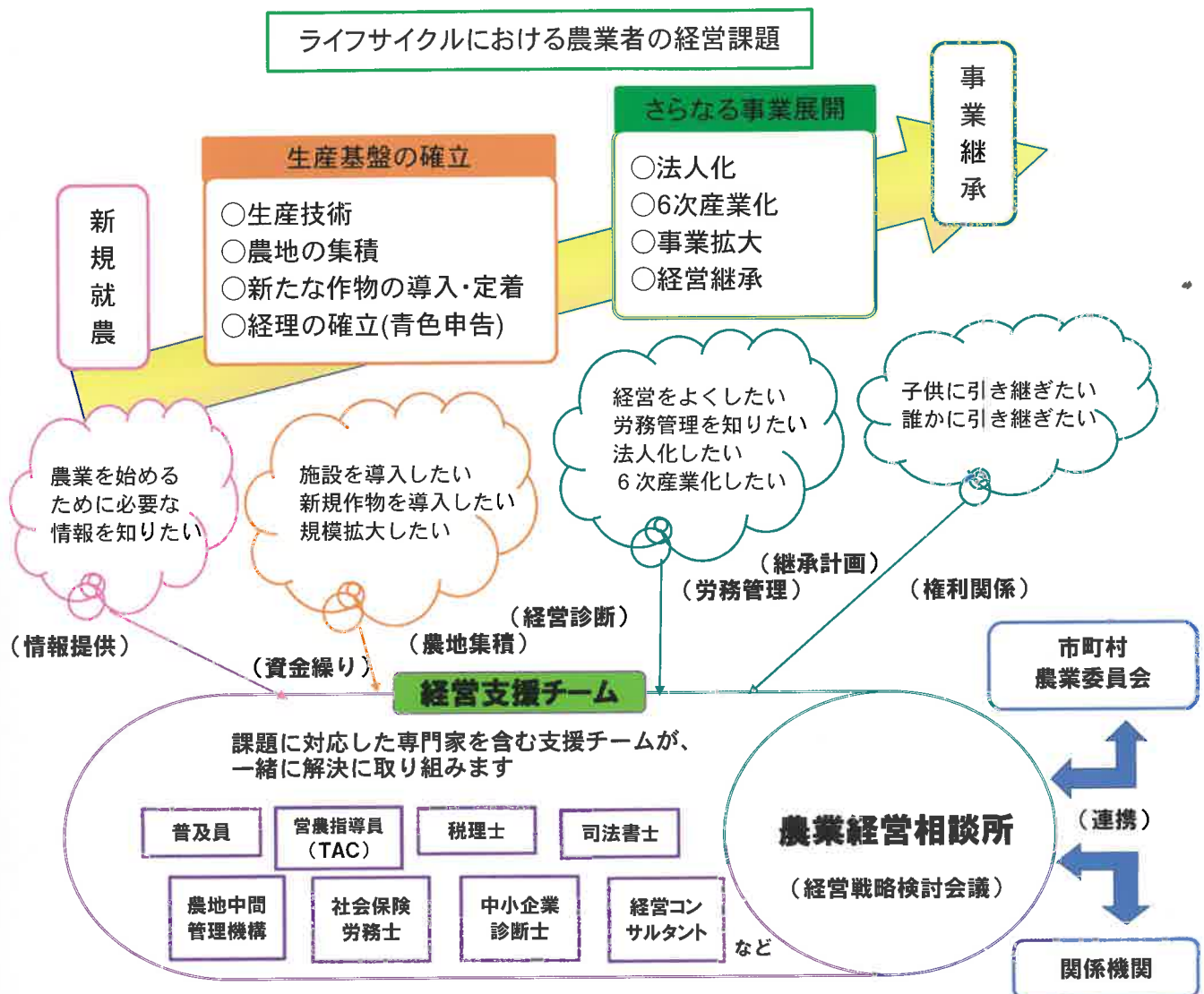
重点指導農業者・経営体

支援が必要な担い手

とっとい農業経営相談所

相談無料

担い手の**農業経営の悩み**を一緒に解決していきます



営農意欲のある農業者が、就農開始から経営継承までの間に、創意工夫を活かした農業経営が展開できるよう、また、円滑な経営継承など経営課題に対し、適切な支援チームを編成して伴走型の経営支援を行います。

【問い合わせ先】

一般社団法人鳥取県農業会議内 (電話) 0857-26-8371
農業経営相談所 (担当: 渡邊)

又は、県農業農村担い手育成機構、JA県域農業サポートセンター
県農業改良普及所まで

(一社) 鳥取県農業会議

〒680-8570 鳥取市東町一丁目 271 番地 県庁第 2 庁舎内
TEL:0857-26-8371 FAX:0857-29-4867

(公財) 鳥取県農業農村担い手育成機構

〒680-8570 鳥取市東町一丁目 271 番地 県庁第 2 庁舎内
TEL:0857-26-8349 FAX:0857-29-4867
